

# 「井伏鱒二著作年表稿」手控え 4

前田 貞昭

## はじめに

本手控えは、既発表「井伏鱒二著作年表稿」で対象とした期間（昭和7年～20年）の内で、第一に、新たに初出を確認できたものについて報告すること、第二に、未確認ではあるが新たに得た情報を報告すること、第三に、誤脱・記述の不正確を補綴することの三つを目的としたものである。

本手控え作成に際しては、岡部知子氏、奥出健氏、林眞氏、山内祥史氏から御教示や資料を頂戴した。資料の入手・確認に当たっては、神戸市立中央図書館・大阪府立中之島図書館・国立国会図書館・日本近代文学館・阪急学園池田文庫・彦根市立図書館舟橋聖一記念文庫を利用させていただき、兵庫教育大学附属図書館情報サービス係のご協力を賜った。記して感謝申し上げる。

なお、凡例は本号に掲載した「井伏鱒二著作年表稿（昭和4～6年）」の凡例と同じだが、ここに新たに掲出する著作の再録書は解題のところに記しておいた（筑摩書房増補版『井伏鱒二全集』・新潮社版『井伏鱒二自選全集』は標題の後に丸数字で示した）。

下記以外にも、まだ多くの井伏文があろうかと想像している。御教示を戴ければ、追加公表してゆきたい。どのような些細なことでも、〒673-14 兵庫県加東郡社町下久米942-1 兵庫教育大学言語系教育講座 前田貞昭宛てお知らせ下さるようお願い申し上げます。

## 昭和7年（1932年）

### 【文芸年鑑 一九三二年版】

文芸家協会編纂・改造社（山本三生）・10月18日（10月13日）・口絵16p.・目次2p.・本文886p.・3円

林眞氏のご教示による。「小説」の項に、井伏「自炊の巻（長篇の一部）」（pp. 9～17）を収録。「鳩時計」（『報知新聞』朝刊・19749号～19779号、昭和7年1月1日～2月1日）からの抜粋。

## 昭和8年（1933年）

逃亡記＝創作＝

蠟人形・4巻4号（4月号）・4月1日（3月10日）・蠟人形社・小川丑之助（西条八十）  
・30銭・pp. 65～69

「――これは平家一門が帝都を逃亡して行つたときの日記である。この日記の筆

者は、平家一門の某中納言といふ人の末子である。彼は帝都から逃亡して行くみちすがら殆んど毎日、丹念に日記をつけてゐるのである。彼は文学少年であつたのであらう。私はその日記の一部をここに雑報的な現代語に翻訳してみる。」と冒頭にある。「八月十六日（寿永二年）」「八月十七日」「八月十八日」「八月十九日」の日記。現在確認されている初出は、「逃亡記（四）」（『作品』18号<2巻10号>昭和6年10月1日）であり、冒頭部分も、『作品』掲載分に、掲載部分の「逃亡記」全体での位置を指示することばがある以外はほとんど同じである。

#### 新宿の味？

レセンゾ？・3年3号（5月号）？・5月？・紀伊国屋書店？

「月報レツェンゾ既刊総目録」（紀伊国屋月報『レツェンゾ』5巻5号、昭和10年5月、pp. 84-85）の内、「名称、レセンゾ／第三年（昭和八年）」の「第三号（5月号）」の項に、「（古代文化・農村・蓮如・メレディス）田辺寿利氏（音楽時評）野村光一氏（文芸雑感）河上徹太郎氏（観劇愚痴）高田保氏（新宿の味）井伏鱒二氏他（絶版）」とあるのに拠る。現物未確認。

#### 【文芸年鑑 一九三三年版】

文芸家協会編纂・改造社（山本三生）・6月9日（6月3日）・口絵16p.・目次2p.・本文674p.・定価3円

林眞氏のご教示による。「小説」の項に井伏「逃亡記」（寿永二年「八月十六日」～「八月十九日」、同「八月二十九日」～「八月三十日」の日記）を収録（pp. 194～203）。現在判明している該当部分の初出は、「逃亡記（三）」（『作品』16号<2巻8号>、昭和6年8月1日）及び「逃亡記（四）」（『作品』18号<2巻10号>、昭和6年10月1日）。なお、掲載本文末尾に「（七年四月「蠟人形」所載）」とあるが、『蠟人形』昭和7年4月発行の3巻4号には「逃亡記」は掲載されていない。本手控えに掲出したように、『蠟人形』4巻4号（昭和8年4月1日）に、「逃亡記」の内、「八月十六日（寿永二年）」～「八月十九日」が掲載されている（『作品』18号・昭和6年10月掲載「逃亡記（四）」に相当）。なお、従来一部の著作年表が「逃亡記」の掲載誌に『蠟人形』を掲げていた根拠は、この『文芸年鑑』掲載本文末尾の記述にあったと推定される。『蠟人形』昭和8年刊行分（第4巻）の内、3・4・5・6・7の各月（号数も同じ）しか確認していないので（但し、5号は直接現物を確認はしていない）、本『文芸年鑑』掲載の「逃亡記」後半（「八月二十九日」～「八月三十日」）が、『蠟人形』の他の号に掲載されている可能性もある。

<無題>＝一、警官から受けた悪印象／二、警官から受けた好印象＝ \*アンケート回答  
話・9月1日（8月3日）・1巻6号（9月特輯号）・p. 282・文芸春秋社・菊池武憲・40銭  
井伏の肩書きに「作家」とある。\*「一、警官数名が小児科医院小池一二三氏宅に乱入し、書棚をひつかきまはして行つたのは不愉快でした。もともと誤解であつたのです。／二、夜ふけに漫然と歩いてゐたら、巡査が煙草をやらうと言つて一本くれました。ちやうどすひたかつたので好印象でありました。」以上井伏回

答全文。

「麒麟」の同人＝新人を語る＝

国民新聞朝刊・11月1日・15053号・5面

パラルビ。\*「『文学界』『文芸』『文芸通信』『行動』といふ具合に同時に文学雑誌が発刊されることになつたといふ取り沙汰なので、たぶんそれ等の雑誌で私の知らない多くの有力な新人が選り出されることであらうが、現在のところでは『麒麟』の同人が目立つてゐると私は考へてゐる。田畑修一郎、寺崎浩、那須辰造、緒方隆士、古木鉄太郎、中谷孝雄氏など（以上身長順であるが）これ等の諸氏は『麒麟』に集まつて、最近みんな一度に進出してしまつた。」たいてい青柳瑞穂宅で、『麒麟』の同人に出会す。「私はどの人の作品がどういふ傾向であるといふやうな批評は遠慮したい。」なお、この雑誌『麒麟』（第三書院発行。創刊は昭和7年8月1日）は、『雄鶏』（紀伊国屋書店発行）の継承誌で、いずれも発行兼編輯人は田畑修蔵（修一郎）。

### 昭和9年（1934年）

マユといふ犬の話＝炉辺夜話（一）＝

信濃毎日新聞朝刊・18559号・1月22日・5面

パラルビ。本文末尾に「（この項終り）」とある。\*「私は昨年の秋、友人の立野信之から一匹の仔犬をもらつた」。「ドーベルマンといふ立派な種族のしかも純粹種」で、大事にするようにとのことであつた。この「マユは仔犬といつても立野のところでは二ヶ月以上も飼はれたのであるから」、新しい環境に落ち着けない様子で吠え続けた。朝になつてようやく落ち着いたと思つたら、立野の奥さんが、どうしてもマユを手離せないと断つて迎えに来た。立野は、マユが近所の久野豊彦の犬と仲良くなつたので、マユをそのままにして千葉の郷里へ帰つた。ところが、マユが立野の屋敷から一歩も出ず、また、マユの生んだ子が死んだことを知つた日に、立野は、上京して来てマユを千葉へ連れて行つた。千葉から寄越した立野の手紙には、「おれがプロ作家だつたためにマユに苦しみをなめさせたのだ」と書いてあつた。なお、「仔犬のこと」（『四季』第1冊・1933年春号、昭和8年5月20日）にも、同様の題材が書かれている。なお、本文中にプロ作家云々と記されている事情は理解しにくいが、「仔犬のこと」によれば、立野が、2年ほど下獄するといつた事情であるらしい。

新春文芸／創作合評座談会（一） \*座談会

信濃毎日新聞朝刊・18571号・2月3日・5面

冒頭に「（出席者）／井伏鱒二、逸見広／酒井真人、保高德蔵／及び本社東京支局記者」とある。パラルビ。18575号（2月7日）まで5回連載。以下に小見出しを掲げる。「石浜金作氏の作品に就いて」「中央公論、文芸、新潮の入選募集作に

就いて」「新人作家の台頭」「中谷孝雄の『三十歳』（改造）」「直木三十五の『私』（文芸）」「堀辰雄の作風」「期待される石坂洋次郎」「横光利一の紋章（改造一、二月号）」「中島直人のワイアワ駅（文学界二月号）」「柴田賢次郎の残される者（文芸首都二月号）」「原二郎の子を売った男の手紙（同）」「園田太郎吉の兄の死と清太郎（同）」。

新春文芸／創作合評座談会（二）

信濃毎日新聞朝刊・18572号・2月4日・6面

新春文芸／創作合評座談会（三）

信濃毎日新聞朝刊・18573号・2月5日・5面

新春文芸／創作合評座談会（四）

信濃毎日新聞朝刊・18574号・2月6日・5面

新春文芸／創作合評座談会（五）

信濃毎日新聞朝刊・18575号・2月7日・5面

本文末尾に「（完）」とある。

山家の温泉と小学校＝春題随想（完）・学芸＝

信濃毎日新聞朝刊・18627号・3月31日・5面

パラルビ。＊甲州の増富温泉は、あまり一般には知られていない。「そのかほり多くの温泉場のやうに盛り場に似たさわがしさがなくて、勉強や静養に行くには好適である。」土地の人達が「山家の温泉」と呼ぶ増富温泉は信州との国境に近いところにあり、旅館の女中も親切である。この村には九つの部落があり、それぞれに分校がある。一番辺鄙な分校では普通の民家を校舎に当てているが、人数が少ないので、不自由はないようである。

昭和13年（1938年）

<無題> ＊アンケート回答

やまと新聞・6月1日

奥出健氏のご教示による。アンケート課題「日支関係の現状を前にして日本のインテリゲンチヤに寄する言葉」。「万葉集の言葉を — 物部乃臣之壮十者大王任乃随意開跡云物会（万葉集卷三）」、以上井伏回答全文。現物未確認。

昭和15年（1940年）

〔標題不明〕 ＊座談会

同盟グラフ？・255号？・7月号？

出席者、井伏鱒二・高見順・尾崎一雄・内田常次郎。尾崎一雄「鮎と岩魚」(『井伏鱒二選集通信』井伏鱒二選集第5巻付録、1948年12月15日)に、「一方、『同盟グラフ』昭和十五年七月号といふのも捜し出した。これには、井伏君、高見順君、僕の三人が、信州上高地で、老山案内人の内田常次郎を囲んでやつた山に関する座談会記事が写真入りで載つてゐる。」とあるのに拠る。なお、同じく尾崎一雄「井伏鱒二に関する雑談」(『井伏鱒二全集第1巻月報』1号・1967年2月)には、「昭和十五年六月初め、井伏鱒二、高見順、私の三人が、青柳優(十九年七月没)に連れられて信州上高地へ行つた。長野県観光協会発行の雑誌に出す座談会記事『山男を囲んで、素人、山を語る』といふのをつくるためであつた。山男とは、戦後亡くなつた内田常次郎老ガイドのことである。」とある。現物未確認。

### 昭和16年(1941年)

三宅嶋噴火の当日＝随筆＝ ⑨ 自⑧

大阪パック・5月1日・36巻6号(5月特別増大号)・大阪パック社(輝文館発売)・植田進午・30銭・pp. 30～32

岡部知子氏(読売新聞大阪本社文化部)のご教示による。目次には「三宅島噴火の当日」とある。挿画・岸丈夫。本文末尾に「(終)」とある。印刷納本日付の記載はない。井伏鱒二随筆全集第2巻『山の宿』(春陽堂書店・昭和16年10月20日)に「三宅島噴火の当日」として初収録。のち、井伏鱒二選集第6巻『架空動物譜』(筑摩書房・昭和24年2月25日)、現代随想全集第22巻『井伏鱒二・河上徹太郎・中島健蔵集』(創元社・昭和29年5月20日)に収録。

### 昭和18年(1943年)

田中貢太郎先生の碑【一】＝関西＝

読売報知朝夕総合版・23936号・4面・8月31日

山内祥史氏の御教示による。23938号(9月2日)まで3回掲載。「桃葉先生の碑」(『読売報知』朝刊・23953号・昭和18年9月17日～23954号同18日)として「井伏鱒二著作年表稿(昭和14年～20年)補遺」(『兵庫教育大学研究紀要』9巻・1981年2月)に掲出したものと同文。神戸市中央図書館蔵で、掲載された第4面の左上隅に「関西」と表示があり、いわゆる「関西版」に該当するもの。先に掲出したものは、国立国会図書館蔵のものによつたが、掲載日付は、こちらの方が早い。

田中貢太郎先生の碑【二】＝関西＝

読売報知朝夕総合版・23937号・4面・9月1日

田中貢太郎先生の碑【三】＝関西＝

読売報知朝夕総合版・23938号・4面・9月2日

本文末尾に「完」とある。